

# 新生・富士スピードウェイ完成!

40年の歴史と伝統を残しつつ  
富士スピードウェイがいにリニューアルオープン

Text/Toshiyuki Endo Photos/Noriaki Mitsuhashi (N-RAK PHOTO AGENCY), Akira Kuroda, Racing on

## R' Topics

1 Completion  
新しいスタート



TF104での「ファーストラン」を務めたりカルド・ゾンタは「路面が非常にスムーズで、直線でのトップスピードは330km/h近くになると思う。コース全体としては、今のホッケンハイムに近い印象を受けた」とコメントした。

(関連記事 P 78)



当日は、40年の歴史を誇る富士スピードウェイが生み出した往年のドライバーたちも大集合。写真左から大坪善男、高橋国光、高橋晴邦、林みのる、見崎清志。5人のこやかな表情が印象的。



トヨタ7とR382が富士に戻ってきた! 旧時を彷彿させる2台のデモラン。トヨタ7は細谷四方洋がドライブ、R382は高橋国光がステアリングを握り、バトルを楽しんだ。



イベント後、富士スピードウェイ島田久光社長(写真中央)、ヘルマン・ティルケ(写真左)、リカルド・ゾンタによる記者会見が行われた。「すべてが一級品」とティルケも大絶賛。

公式入場者数、2万5000人。過去の富士スピードウェイでの観客数データ、例えばグループA最後のインターTECでの9万4600人などを引っぱり出してくると、今回のリニューアルカーニバルの入場者数は「少ない」部類になってしまう。だが、場内と周辺道路の混雑は2万5000人級とは思えない。グラウンドスタンド周辺に人が集中しやすいため、イベントであること、ゲート誘導等に多少の不慣れがあつたことを考慮しても、混雑度の「一体感」と「数字」に違和感がある。

まあ、プロ野球が観衆の実数発表に移行するなどしている時世だ。新グラウンドスタンドの席数が2万2000であることを考えれば、今回の数字はともリアルなものであり、集まった人々の新生・富士スピードウェイに対する大いなる期待が、これほどの大混雑という「熱気」となつて現出したことに驚くと同時に、うれしさを覚える。個人的なことを言わせていただくと、筆者は富士まで順調ならクルマで30分ちよつとという立地であつた。初めて生で観たレースは88年夏のF3000。スタートのタイミングがよく分からず、グラウンドスタンド裏に焼きそばを買いに行つていたら轟音とともにレースが始まつてしまひ、スタート直後の上位陣の接触事故を見逃すという初心者ミスの記憶が今も脳裏を離れない。生まれ変わった富士スピードウェイで、これからのたくさんの人々が多くの思い出を刻むことだろう。

さて、新しい富士にかかる期待は、やはりF1開催。早ければ07年にも? などという声がかかっている中、島田久光社長は2月の落成披露の際と同様、「まず、器」を完成させてからです。ハードのリニューアルは一段落しましたが、ソフトウェアである「ひと」のリニューアルはこれから本番です」と語る。

現代F1サーキット設計の第一人者であり、この富士も手掛けたヘルマン・ティルケもリニューアルカーニバルに登場、「40年という、このサーキットの伝統を尊重することが今回のコンセプトだった。約80パーセントの部分については既存のものを残し、20パーセントを完全な新設計とした」とコメント。今回発表となつた各コーナーの名称にも、その思想が反映されたかっこうである。

この日と翌日にはスーパーGTの合同テストも実施された。ベテラン服部尚貴に聞いたところ、「コース前半の雰囲気は旧コースに近い。路面のスムーズさがウリ? たしかに、そういうところは感じられるね。グリップに関しては、これからもっと上がってくるんだろうけど」

GTのトップタイムは、服部がマークした1分34秒201(約174km/h)。このタイムと、セバヤ鈴鹿でのGTとF1のタイム差(平均速度の差)をベースに計算すると、F1の富士でのタイムは1分13秒14秒くらいになるはずだ。

リニューアルカーニバル当日に、前週のバーレーンGPでの予選1回目ベストタイムの平均速度で富士を走つた場合の仮定でも1分15秒台になることを計算してみても、ティルケに「F1のラップタイムはどれくらいか?」と質問したところ、「1分19秒20秒くらいは想定だ」との答え。「15秒とか出ませんか?」と聞くといふので「そんなふうな感じか?」と尋ねてしまった。これ以上、天下のティルケを論破するだけの裏付けと語学力をもたないため、その場は引き下がったが、いつの日か、F1マシンがティルケの「想定外」の速さで富士を走る姿に期待したい。

一方、新生・富士になつても、まったく不変だつたものがひとつあつた。霧である。GT合同テスト2日目は見事に、富士名物ともいえる霧に見舞われた。これはやはり、さすがのティルケにもどうにもならない。イベントも観客も、この霧との付き合いを強いられることだけは、相変わらずのようだ。